

復興の種

留学生2人持ち帰り

アフガン帰国

アフガニスタンを救う「希望の種」に……。横浜市立大大学院(横浜市金沢区)で2年間学んだ同国の留学生2人が10月上旬、日本で品種改良された小麦の種を携えて帰国する。現地ではほぼ絶滅したアフガン在来種の種が同大で研究用に保存されており、この品種を基に病気や栄養不足に強くなるよう改良された。戦乱で荒廃したアフガンの復興に役立つことが期待されている。(黒岩竹志)

* 留学生はアハマッド・シヤール・スタニクザイさん(37)とアジズ・アハマッド・オスマニさん(28)の2人。母国の農業省で小麦の品種改良などを担当していたが、2012年9月に同大大学院に留学してきた。アフガンは元々小麦や果物の生産が盛んで輸出もしていたが、1989年のソ連軍撤退後の内戦やアフガン戦争の混乱で農地が荒廃。生産性の高い外国産の小麦が普及し、在来種はほぼ絶滅したという。だが、外国種は乾燥の激

横浜市大にあった小麦在来種



卒業式で窪田学長と握手するオスマニさん(中央)と拍手するスタニクザイさん(左)(30日、横浜市立大金沢八景キャンパスで)

しいアフガンの気候に合わず、スタニクザイさんによると、同国での1畝当たりの収穫量は平均で約2ト。国内で完全自給するには収穫量を4トに引き上げる必要がある。収穫量アップのカギとなるのが、乾燥に強い在来種の復活だ。

その在来種が日本で保存されていた。55年、小麦のルーツを調べていた京都大の木原均博士(故人)らが卒業式で窪田学長と握手するオスマニさん(中央)と拍手するスタニクザイさん(左) (30日、横浜市立大金沢八景キャンパスで)

2人は在来種を基に、栄養不足や病気に強い新品種の開発に取り組んだ。帰国後は持ち帰った約500粒を実際に植えて生産量などを確認する予定だ。

* 横浜市立大金沢八景キャンパスでは30日、2人のための卒業式が行われた。大学関係者ら約30人が集まり、窪田吉信学長は「あなたたちと一緒に帰国する小麦の種は、アフガニスタンを危機から救う希望の種です」と述べた。

オスマニさんによると、アフガンでは国民の8割以上が農民だが、生きていくために反政府勢力に参加する農民もいるという。スタニクザイさんは「この種を実らせ、アフガンを以前のような農業国にしたい」と意気込んでいた。